

平成30年度 蟹江北中学校 自己評価

(1) 成果

- ほとんどの項目で評価平均が2.5以下であった。全体として、学校行事や部活動への取り組み、友達とのコミュニケーション、いじめや差別をなくす意識が向上していると思われる。今後も生徒の様子に目を配り、生徒を中心に据えた集団づくりを心がけていきたい。その一方で、生徒同士のトラブルや深刻な悩みをもっている生徒もいる。集団全体の指導に加えて個別の指導で生徒に寄り添い職員全員で生徒を成長させていきたい。
- 1「学校生活を楽しく送ることができているか」は、「できる」の割合が圧倒的に多い。教師に比べて生徒の点数がよいのは、生徒に学校生活に前向きな気持ちがあり、自己肯定感が高いとも考えられる。生徒、保護者、教師ともに高評価なのは、生徒にとって過ごしやすい環境がつけられているからだと考えられる。
- 2「時間を守る」では、学年が上がるにつれて、時間を意識するようになっている。生徒会主催のノーチャイム活動等が高学年ほど身に付いてきていると考える。
- 10「行事に意欲的に取り組んでいるか」は、生徒、保護者、教師とも高い評価であった。学校行事についての取組に生徒が大変よくできたと満足感を覚えており、今後も、学級や学年集団の自治力を高めていく支援を続けていきたい。
- 12「いじめや差別をしていないか」について、生徒や保護者の評価が高い。担任からの声かけや二者懇談などの小さな取組の積み重ねの成果であると考えられるため、今後も継続していきたい。ただし、「できていない」を選んだ生徒が8人いるので、注意してみていく必要がある。
- 13「マイナス言葉をひかえ、プラス言葉を意識して使っているか」の生徒評価が比較的高い。生徒はプラス言葉を意識して行動できていると感じている。これは、毎月、プラス言葉・プラス態度週間が設けられているからだと考えられる。マイナス言葉の使用を減らしていくことで人権尊重意識を高めていきたい。(マイナス言葉の使用とプラス言葉の使用の質問項目を分けて質問すると、更に具体的な生徒の姿が見えると思う。)
- 15「係活動～清掃に意欲的に取り組んでいるか」では、学年が上がるにつれ意識されている。日頃の指導が、生徒の責任ある行動につながっていると思われるので継続的な取組が必要である。

(2) 課題

- 保護者と生徒の評価はある程度一緒だが、教師の評価との認識のズレがある。そのズレの原因を考察し、指導方法の改善に努めていきたい。

- 4「時と場に応じた言葉遣いができているか」については、生徒、保護者と教師の間で意識の差がある。学校での言葉遣いの課題としてとらえ、教師自身も、言葉遣いに気を付けていくとともに、生徒が社会に出て困らないような丁寧な言葉を指導していきたい。
- 5「挨拶や素直な返事ができているか」については、生徒は評価が高いが、教師の評価とのギャップがある。生徒の言葉の不十分な部分を、その都度教えていく必要がある。
- 6「学習に意欲的に取り組んでいるか」は保護者の評価が低い。授業や部活で疲れて帰ってくるため、家庭学習と学校から出る課題の量とのかねあいを再確認していきたい。
- 7「学習内容が理解できているか」については、保護者の評価が低い。学力を高めていかなければならない。学習方法を伝えたり、生徒に主体をおいた分かりやすい授業を行うことを心がけていきたい。
- 8「わからない点を質問できているか」という点について、授業中に聞くことが恥ずかしいと感じる生徒がいたり、休み時間に聞く時間をつくれない生徒がいたりすると考えられる。しかし、教師ができているとされていて生徒からするとわからないと感じているのは課題である。
- 15「係活動・当番活動・清掃に意欲的に取り組んでいるか」の係活動や当番活動では生徒の思う『意欲的』と教師の思う『意欲的』で差がある。具体的な目標を掲げていきたい。
- 16「交通ルールを守る」については、生徒、保護者と教師の認識のズレがある。「自転車の並進」の苦情などを時折地域からいただく。交通ルールの遵守やマナー向上の更なる注意喚起が必要である。
- 18の「基本的な生活習慣」について、3年生になって平均がダウンしている要因として、入試にむけての学習時間が増えることによる生活習慣の変化も考えられる。
- 19「努力を認められているか」については、生徒と教師で意識の差がある。生徒は努力していてもそれを認められていないと感じている。それぞれの生徒の努力を言葉にして認めていくことの重要性を再確認し、温かい言葉がけを心がけていきたい。